地域支援意識を高める臨床心理士養成プログラムの意義と評価

― 地域実践活動（アウトリーチ）を中心に ―

國吉　知子

（人間科学研究科教授）

1．はじめに

―心理相談室における地域実践活動のとりくみ―

本学心理相談室は、現在、院生13名、研修生８名、教員、非常勤カウンセラーを合わせても30名に満たないごく小さな組織である。本相談室の特徴の一つに、このように小規模でありながら、通常の心理相談活動の他に、相談室内に地域実践部というセクションを別に設けて、地域実践活動に力を入れていることが挙げられる。

本学人間科学研究科大学院臨床心理学専攻では、07年度～09年度の３年間、文部科学省「大学院教育改革プログラム」を実践してきたが、そのキーコンセプトは「地域実践の創造」であった。そこで新たに創設された心理相談室の活動は、地域実践実習（地域実践の現場を知るための外部施設実習）以外に、①「みつば会」（地域現場で臨床心理士として活躍している修了生と在学生の事例検討合宿）、②「心理相談室ウィーク」（夏期１週間の体験無料相談と心理相談室見学、教員による公開講演会）、③「地域支援を考えるためのシンポジウム」、④国際性を視野に入れた臨床心理士養成（韓国、台湾の心理学系大学や施設との学術交流や「臨床心理比較文化特論（海外での臨床心理士の活動について学ぶ）」の実施）であった。これらの活動は３年間順調に進められ、海外との交流以外のプログラムは、文部科学省の予算終了後も引き続き継続実施している。

さらに、今般３年間の上記活動実績に加え、本学独自の地域実践活動として、新たに「アウトリーチ活動」を心理相談室担当教員の合意のもと開始するに至った。これは、これまで形成してきた地域とのネットワークを強化し、さらなる地域実践活動の展開を目指すプロジェクトであり、①本心理相談室に関わる臨床系教員が要請に応じて、全くの無償で近隣（西宮市内）の幼稚園、小学校・中学校などの諸施設に出向き、コンサルテーションや講演を実施、②院生、研修生（院修了後、１年間心理相談室に在籍し、ケース担当を行う者）を随行させ、現場での体験を通して臨床心理士の地域実践に対する意識をより高めるという２点から構成される。なお、アウトリーチ活動を含め、これら一連の地域実践部の活動のほとんどは、今年度は、筆者と臨床系教員他２名（小林哲郎教授、石谷真一教授）との３名によって申請した本学の研究所助成金によって運営された。本稿は、新設のアウトリーチ活動を中心に、本相談室地域実践活動の報告と振り返りをおこなうものである。

2．養成大学院の心理相談室が地域支援活動をおこなう意義

臨床心理士は相談室で来談者を待ち、訪れた来談者の相談に応じるというイメージが今なお根強いようである。臨床心理士の活動には「心理相談」「心理査定」「研究活動」「地域援助」の４種類があるとされる（日本臨床心理士会）が、その中でも、「地域援助活動」は新しい分野であると思われているようである。しかし、実際には、臨床心理士はこれまでにさまざまな社会活動をしてきている。例えば、1994年にはHIVカウンセリングワークショップ、1995年には阪神淡路大震災への支援活動、1996年には犯罪被害者支援、O-157感染症問題への支援、2000年には高齢者支援、子育て支援委員会の設置やこころの健康電話相談の開始、最近では、遺伝子カウンセリングなど最先端の医療分野にも進出するなど、常に社会の動向を察知しての活動が繰り広げられてきている。また、スクールカウンセラーであれ、医療分野の心理士であれ、様々な職種との連携や緊急支援への対応といった“柔軟性”なしに仕事は成り立たず、密室での相談活動だけがすべてであ

るというような認識では立ち行かない現実がある。つまり、現代において、臨床心理士として活動するにあたり、我々は広く社会的視野を持ち、社会活動として臨床活動を捉える視点を持つことが不可欠になっている。だが、大学院の相談室は来談者への対応が中心となりやすく、大学院生たちが地域とのつながりを実感できる機会は非常に限られていると言わざるをえない。

臨床心理士による地域支援活動を考える際、コミュニティ心理学的視点が役に立つと思われる。山本（2001）によれば、コミュニティ心理学の理念として、（1）治療より予防の重視、（2）密室から生活場面へ（3）人と環境の適合を重視（4）強さとコンピテンスの強調（5）多様性の尊重（6）代替物、選択肢を提供すること（7）エンパワーメントの重視が挙げられている（Duffy & Wong, 1996）が、これらの重要性は我々も実感するところである。火事は起こってからの消火より予防が肝心で、心の問題も同じである。ここまで心の問題がこじれる前に対応する術はなかったのかと考えさせられる事例に出会うたびに、予防的介入の必要性を痛感する。また、以前に増して、スクールカウンセリングや子育て家庭への巡回訪問など現場（生活場面）での即時対応が求められているが、直接介入が難しい場合でも、現場でクライエントを取り巻く環境との相互作用を読み取ることで環境調整が可能となり、それが改善のきっかけとなることも多いものである。さらに、問題の所在を求める視点から、当人の健康さ、強さに焦点を当てて、効力感やリソースを活用する視点への転換は、限られた時間内での対応においては特に重要であるだろう。人間の持つ差異や多様性を認め、それぞれに応じたオーダーメイドの対応の工夫が大切であることは言うまでもなく、こちらが最適と思う対応を決めて一方的に投与するのではなく、当事者が最適なサービスを選べるような選択肢の提示の工夫が当事者の効力感を高めることにつながる。臨床心理士があらゆる問題に対応できるわけはなく、最終的には、むしろ個人やコミュニティをエンパワーメントすることで、現場で持続可能な対応システムを構築するという視点で関わることが利用者の依存性を高めないためにも肝要であると思われる。もちろん、個人個人の問題に深くしっかりと向きあい、じっくりと時間をかけて関わることの重要性は言うまでもないが、このようなコミュニティ心理学の視点は、時間や資源が限られた中で臨床心理士の視点を効率的に生かしていくうえで有効なものであると言えるだろう。

地域支援という観点から、スクールカウンセリングの現場を考えてみても、臨床心理士に求められる活動は、①生徒や保護者へのカウンセリング、②教職員へのコンサルテーション（問題生徒の査定を含む）、③教員、保護者、生徒対象の心理教育的講演や体験学習（グループワーク）の実施、④関係機関との連絡、調整、⑤ネットワークやシステムづくり、⑥危機介入などが挙げられ、これらはまさに、上記のコミュニティ心理学の考え方が有効になる活動であることが理解できる。学生たちの日々の相談の力量を育成するのはもちろんであるが、我々は、それに加えて、これらの活動スキルの育成が、彼女たちの臨床心理士としての活動領域をさらに広げていく推進力になると考え、大学院教育改革プログラムを基に、これまで地域援助活動の充実に力を注いできた。

本学の地域実践部によるプログラム（詳細は次節）には、実は、上記①から⑥のすべてを網羅した内容が埋め込まれている。上記①は言うまでもなく、日々の相談活動が該当する。②のコンサルテーションや③の講演やグループについては、それらが学内だけでなく、現場でどのように実践されているのかを知ることが重要であろう。なかでも、特にコンサルテーションは、実施には相当な経験が必要となるため、なかなか初心者が体験することは難しい。そこで今回、アウトリーチ活動を新たに立ち上げ、教員がコンサルテーションや講演に出て行くことで現場とのつながりを強め、そこに院生を陪席させることで、自らが将来実施する臨床心理士の職域イメージを拡大することを狙った。また、アシスタントスタッフとして参加することで、主催者としての自覚を促し、サービス提供者への視点転換が図られることを期待した。④⑤は、心理相談室ウィークでの学内の講演会やみつば会合宿の準備、シンポジウムの準備、運営などを通して、実際に組織や事業の企画運営を実体験してもらうことでチームや組織として協働する姿勢を学んでもらうことを目指し

た。⑥の危機介入については、心理相談室ウィークの無料体験相談（1回のみのカウンセリング）担当という経験を通して、危機介入的相談のあり方について考える機会として位置づけた。さらに、こういった活動をおこなうために、広報活動としてこれまでより多く、年に3回程度、心理相談室の行事やプログラムについてチラシや相談室案内の送付を行ったが、それらの活動においても、例えば、パンフレットや添書の封筒への封入の仕方なども含め、院生が実務力を高めていくための教育機会と捉えた。このように書くと、いかにも教育先行と思われるかもしれないが、地域実践部の活動は、この3年間、大学院教育改革プログラムにより培ってきたネットワークをさらに発展させ、地域のために還元して用いたいという社会還元の目的が第一義にあることは言うまでもなく、本稿はこれらの地域実践活動についての教育的視点から改めて考察しようと試みるものである。

3．今年度の地域実践活動の概要

今年度、本相談室が実施した主な地域実践活動は下記のとおりである。

（1）7月3日～4日 「みつば会」
(修了生と在学生の事例検討合宿)
外部講師：大山泰宏氏
(京都大学大学院准教授)
会場：シャトーテル大手前

（2）7月29日～8月4日　心理相談室ウィーク
①無料体験相談（7月29日～8月4日）
②公開講演会と心理相談室見学（8月2日）
講演会講師：石谷真一教授
タイトル「世代間伝達と関係性の問題～手がかりは生い立ちの中に～」

（3）8月2日　鹿児島大学大学院との交流会
文部科学省大学院教育改革プログラム実践大学院の中でも、特に地域支援に重点を置いた活動をしている大学院の教員同士での情報交換の時を持った

（4）アウトリーチ活動
①アウトリーチのお知らせ・案内（アンケート）送付（前期1回、後期1回）
②アウトリーチ活動（計6回）実施
随行院生：計15名
活動内容：コンサルテーション3回、講演3回
依頼対象：幼稚園3園（私立）、
小学校3校（公立）

（5）2月19日
地域支援を考えるためのシンポジウム
講師：辻河優氏（臨床心理士）、石谷真一教授、
伊藤園子、出口明日香（院生）
「親になることの楽しさ・むずかしさ
～キンダーカウンセラーから見た現代の
父親と母親～」
会場：西宮市大学交流センター

日常の大学院教育や心理相談活動等の他に、上記のような地域実践活動を実施したのは、教員、学生にとってかなりの負担であったことは事実である。昨年度までは、文部科学省からの予算によりGP推進室に非常勤の事務担当者が存在したが、今年度からは心理相談室が実施主体となったため、事務的負担が教員、専任カウンセラー、院生、心理相談室事務担当者いずれにも多くかかった。また、特にアウトリーチ活動では、コンサルテーションや講演など活動そのものだけでなく、依頼先の長や、窓口の先生方など、多彩な方々との応対や事前調整のためのやりとりが求められた。これらのことから、臨床心理士といえども、事業企画・運営能力、営業・宣伝力、事務能力等が必要であることが再確認されたと言える。その意味では、先にも述べたが、我々にとって、大学という限られた場を抜け出し、現場の諸問題を認識するとともに、副次的にせよ現実検討力を高めるよい訓練の機会となったのではなかろうか。

4．アウトリーチ活動実施機関からの評価

アウトリーチ活動を実施した機関に簡単なアンケートをお願いし返送依頼したところ、下記のよう

な内容が返ってきたので一部紹介する。(現時点での返送分５件について紹介。) 設問は①内容についての４段階評価（大変良かった、良かった、あまり良くなかった、良くなかった)、②感想（自由記述）③要望（自由記述）から成る。

①内容についての４段階評価
大変良かった３件、良かった２件、あまり良くなかった０件、良くなかった０件

②感想　自由記述内容を転載
（ただし紙面の都合で一部省略している）

A 幼稚園（コンサルテーション）：具体的な（子どもへの）関わりの仕方、見方の指導をいただき、現場の職員も対応策の手応えを感じとっていました。また、背景の話から、その子一人の事を知る大切さを感じていました。普段の関わり、保護者対応等、実践に移していきたいと思います。

B 小学校（コンサルテーション）：今後の対応を含め、いろんな面から話をしていただき勉強になりました。担任だけではなく、学年、学校全体で話をし、ひとりひとりの子どもに関わっていきたいと思います。

C 小学校（講演）：体験ワークも交えながらわかりやすくお話していただき大変参考になりました。(中略）ほめること一つを取っても、相手に関心を持って納得できる部分を口先だけでなく感動を伴ってほめる。簡単なようで難しいですが頭の中が整理されたように思います。肯定的無条件に子どもを認めることを心に置きながら接することができたらと思いました。参加者の感想の多くに、(講演の内容を）早速取り入れて子どもに接したいと述べられていました。今回のお話をお聞きして子どもとの関わり方のヒントをたくさんいただいたように思います。

D 小学校（講演）："子育ても教育も心を使う力仕事" ということが私自身とても心に残っています。子どもと真剣に向き合うことには力もいるし、本気で叱った後はすごく疲れていたり、日々を振り返ってそうだなあとしみじみ感じました。最近の子どもたちは人とのコミュニケーションが難しいといわれていますが、ぶつかっていったときの反動に耐える素地が今一つそだっていないのが（中略）人間関係が育ちにくい原因のひとつなのかなあと先生のお話を聞かせていただきながら考えていました。

E 幼稚園（講演）：子育て中の保護者が抱きやすい日々の迷いや悩みに対するヒントや親の姿勢、対応の在り方のポイントを的確に押さえてお話くださり、大変参考になったことと思います。実生活に取り入れて、親子の信頼感をまずベースに子ども達に向けて良いメッセージを発信できる保護者が増えてくることを願っています。グループ討議は予想以上に盛り上がり、意見交換の良い機会でした。最近の親の苦手とする本気度、毅然とした態度の大切さで講演会を締めくくってくださってとても有り難かったです。

③要望（自由記述）

A 幼稚園：継続する指導、機会を作ることができればと思います。(年２～３回)

D 小学校：目先の姿に振り回されず展望を持つことができるようなお話をまたぜひお伺いする機会があればと思います。

E 幼稚園：大きな社会貢献活動をしていただき、保護者によき学びの機会を与えて頂きました。(以下略)

非常に肯定的な評価をいただけたことは、我々にとって大きな励みとなるものであった。臨床心理士に対する期待の大きさやニーズの高さが、また、それだけでなく、現場の先生方の日々ご苦労されている様子や教育への熱い想いが、これらの文面から伺い知れる。臨床心理的な見方が現場の先生方や保護者の方にとって確実に一つの刺激となっていることも理解できる。ただ、当方の事情により、無料アウトリーチは同一機関には年に１回のみとせざるを得ないため、同一年度内の継続実施の要望に応じることは現実には難しい。実際、初年度ということもあり、アウトリーチは後期に６機関から依頼を受けたが、いずれも年度末業務が集中する時期と重なり、担当教員には過重労働となっていた。また、修論提出時期の実施依頼が多かったためM2は陪席しにくかった。さらに教員の対応可能な曜日や時間帯が授業や会議等の関係で実施曜日に若干偏りがみられ、参加したくてもできない院生もいた。これらは、学生たちのアンケートでも触れられていたが今後の課題である。

５．学生たちへのアンケート調査から

アウトリーチ活動途中であったが、大学院生に地域実践活動についてのアンケート調査をおこなった。内容は、(１）みつば会　(２）心理相談室

ウィーク　（3）アウトリーチ活動　（4）地域実践部の活動　に分けて、それぞれどの程度有意義であったか、自分の取り組み姿勢について、今後の改善点などについて尋ねた。結果をすべて掲載するのは紙面の都合でできないため全般的傾向について紹介する。なお、アンケートは、院生と研修生全員（計30名）に配布したうち、20名が回答した。（回収率　66.7%）

（1）みつば会事例検討合宿について

みつば会が有意義な点について自由記述で回答を求めたところ、①現場の先輩の事例検討ができること、②外部講師のコメントが聞けること、③先輩方との交流、情報交換ができる、の3点に集約された。昨年はスクールカウンセラーの事例を、今年は養護施設の事例を聞くことができ、院生にとっては現場における臨床心理士の活動の実際や外部講師の着眼点やコメントに触れたことは新鮮だったようである。

「みつば会がどの程度有意義であったか（有意義度）」「どの程度みつば会にコミットしたか（コミット）」「みつば会全体への取り組み姿勢はどうだったか（取り組み姿勢自己評価）」「みつば会の経験によって、あなたの地域実践意識はどの程度高まったか（地域実践意識の高揚）」という問いについて、それぞれ5件法で回答を求めたところ、平均は「有意義度」4.4（Range 4–5）、「コミット」3.8（Range 2–5）、「取り組み姿勢自己評価」3.5（Range 3–5）、「地域実践意識の高揚」3.8（Range 3–5）となった。「有意義度」は全員4か5をつけており、みつば会実施の意義は大きいことがここからも理解できる。

「自己評価理由」や「今後の改善点」を自由記述で尋ねたところ、幹事や発表者以外の院生、研修生の中には会の運営に直接携わらなかった、あるいは、2日目は参加しなかったなどの理由から十分コミットできなかったと自己評価する者が散見された。また、「今後の改善の工夫」として、宿泊型ではなく1日研修を提案する意見、2日目も現場の先輩の事例検討を希望する意見（現在は、2日目は院生の事例検討）などもあった。現状では外部講師は1日目のみの参加となっており、出席者が1日目に偏る傾向があり、1日で終わる形を希望する気持ちは理解できる。だが、たとえ既知の院生の事例であっても普段とは異なる空間・時間枠・フロアメンバーの中で十分時間をとって事例を丹念に深く検討できるのは宿泊研修ならではの良さである。事例検討会後、懇親の席などで時間を忘れ、日頃聞けない臨床についての実践的な話を先輩や先生方から身近に聞くことができる点など、宿泊研修にはその気になれば活用できる要素は多々ある。今年は幹事役の院生の尽力によって参加費を抑制しつつ利便性のよい会場を開拓できた。修了生の参加を増やすことなどまだ改善点は多いが、合宿という形態をもっと活かしてくれることを期待したい。

（2）心理相談室ウィーク　講演会

毎年夏に実施している心理相談室ウィーク講演会について、「講演会はどの程度有意義であったか（有意義度）」「講演会準備へのあなたのコミットメントの度合は（コミット）」「講演会が開催されることであなたの地域実践意識はどの程度高まったと思うか（地域実践意識高揚）」の3点について5件法で問うた。さらに、「講演会が有意義だったのはどのような点か」「講演会が地域実践意識高揚に役立った点」「講演会をさらに有意義にするための工夫は」の3点について自由記述を求めた。

回答者20名中、講演会参加者は14名、不参加者6名であった。参加者の平均は「有意義度」3.9（Range 3–5）、「コミット」3.6（Range 2–5）、「地域実践意識高揚」3.8（Range 2–5）であった。「コミット」得点を低くつけたのは、運営に直接携わらなかった研修生がほとんどであった。ただし、現役院生でも曜日の関係で講演会に出席できなかった者もいた。「有意義だった点」は、地域の方々の来聴される姿勢や質疑応答の様子などを通して地域の心理的問題への関心の高さを知ったことであった。回答の中には、講師の話が自分にとって目新しかったかという参加者目線で感想を述べた学生もいたが、我々はあくまでも主催者側であるという点は忘れないでいてほしいと思う。「工夫」では、広報活動の充実を3名が挙げていた。広報活動としては、地域の幼稚園、保育園、小、中、高校、大学、医療機関、公的機関へのチラシやポスターの発送、地域情報誌や新聞掲載、大学ホームページ、先輩へのメーリン

グリスト配信、大学同窓会誌での紹介などを既に実施しているが、そのことを院生がどの程度理解しているかについては、我々教員は意識していなかった。院生や研修生にできる広報活動について学生自身に考えてもらうことも一案であり、その重要性に気づくことができた。

（3）無料体験相談について

心理相談室ウィークでは、1回のみの無料体験相談を実施しているが、「ケース担当の有無」「無料相談はどの程度有意義であったか（有意義度）」「無料相談によって地域実践意識はどの程度高まったか（地域実践意識の高揚）」について、5段階評定をおこなった。ケース担当（電話申込応対）できた者は、回答者20名中6名、ケースや電話応対の機会がなかった者は14名であった。担当経験者と非経験者に分けて平均点をみたところ、「有意義度」平均は、経験者4.7（Range 3-5）非経験者3.1（Range 1-4）と大きく異なっていた。また、「地域実践意識の高揚」の平均は、経験者3.8（Range 3-5）非経験者3.4（Range 1-4）であった。有意義に感じる度合は、やはり無料体験相談・申込の対応者の方が高い。だが、「地域実践意識」については、経験群と非経験群間に大きい差はなく、たとえ直接相談を担当する機会がなくとも、相談室スタッフとして担当者の様子を間近で見聞きすることの効果があったと思われる。非経験者の感想に「ケース担当しなかったが、このような活動があることを知り刺激を受けた」や「相談を持つことはなかったが、M2さんの相談前の様子などを知ることができた」「普段のケースとクライエントさんの雰囲気が違った」「担当者から1回で相談をまとめる苦労などを聞くことができた」といった報告があり、もし自分だったらどう対応するかという視点でこの活動を捉えていることが伺える。これは、カンファレンスで無料体験相談についてケース報告し、さらに院生同士で1回のみの相談と日頃の相談の対応の相違についてディスカッションした後、再度教員を交えて意見交換の時間を設けるという形で、やりっ放しにせず、ていねいに体験を共有し洞察する機会を作っていることも寄与しているのではないかと思う。

（4）アウトリーチ活動について

アウトリーチ活動については実際の結果を表1に紹介する。今年度初の企画であり、12月以降に6件の申込をいただいたが、アンケート回答時点で、まだ2件しか実施されておらず、残り4件分のアウトリーチ活動は下記の結果には反映されていない点はご了解いただきたい。アウトリーチ活動についてのアンケート質問項目と各学生の回答を以下に示す。

〈アンケート質問内容〉

（Q1，Q2，Q5は全員が回答、Q3，Q4は陪席経験者のみ回答）
Q1：アウトリーチという言葉をどの程度知っていましたか？（5段階）〈言葉の知識〉
Q2：アウトリーチ活動にアシスタントとして陪席しましたか？（はい1；いいえ0）〈陪席の有無〉
Q3：依頼施設に赴く前にその施設のことについて調べましたか？（はい1；いいえ0）〈事前調査〉
Q4：現地で自分は何をすべきか、教員への事前確認や役割の申し出をしましたか？
（積極的にした3：ほとんどしなかった2；まったくしなかった0）〈事前関与〉
Q5：アウトリーチ活動であなたの地域実践意識は高まったと思いますか？（5段階評定）〈意識高揚〉

表1　アウトリーチ活動についての回答

学生ID	Q1 言葉の知識	Q2 陪席の有無	Q3 事前調査	Q4 事前関与	Q5 意識高揚	（自由記述内容）①～③は参加者のみ回答 ①現地でどのようなことができましたか？ ②アウトリーチ活動に参加して気づいたこと ③次回参加するときに注意したい点 ④アウトリーチ活動がよりよいものとなるため自分にできることは何か ⑤アウトリーチ活動がさらに有意義になるために今後できる工夫は
01	2	1	0	3	5	①先生と現場に伺い、臨場感を持って実際の子どもさんの様子を体感できた ②臨床心理士のニーズが高いことを知った ③子どもと関わる機会があれば、積極的に関わりたい ④様々な現場に出向き、現状を身をもって知る ⑤機会があるならできるだけ参加したい。参加人数枠が増えると有り難い

表1　アウトリーチ活動についての回答（続き）

02	3	1	1	1	5	①一緒に行かせていただいた先生のお話を横で聞くことが多かったので、アシスタントとして、正直、何ができたのか反省している ②現場の先生方は保護者からアドバイスを求められ、困惑しておられたが、今回（コンサルテーションによって）安心されたように感じた。学校に常駐する臨床心理士が必要だと強く感じた ③次は事前確認や役割の申し出をしようと思う。自分に何ができるか考えたい。 ④アウトリーチ活動を様々な機関にできる範囲でお知らせすること ⑤積極的にアシスタントとして参加し、その際自分の役割や機能、臨床心理士に求められていることを積極的に考えたい
03	3	1	0	1	5	①アシスタントの側から発言することはなく、ほとんど何もできなかった ②小学校の現状や教師の方々の立場について改めて気づかされた ③メインは先生だが、アシスタントなりにその場で考えながら行動、発言したい ④その場で求められることを素早く認識し、自分なりの考えを持つ ⑤多くの院生が参加できるよう曜日をばらけさせる。事前に行かれる先生と参加学生で集まり、流れを確認する
04	2	0			4	④積極的に参加すること、視野を広く持って様々な場所へ行くこと、できることをしっかり確認し、実行すること ⑤事前にある程度の説明がほしい。「行ける人が行く」でよいのか、人数制限などしっかりしてほしい
05	3	0			3	④現場では積極的に行動したい ⑤時間がとれるのであれば、行かれる先生と内容を打ち合わせして、アシスタントができることを把握し、各自で勉強しておくなどができればと思う
06	2	1	0	1	4	①ほとんど何もできなかった。教えてもらうことばかりで、どのように振る舞えばよいか難しかった ②守秘義務もあり、事前に相談される子どもさんについての情報がなかったので、担当の先生にもっとお伺いしておくべきだった ③事前にいろいろと調べておくこと ④院生が様々な学校に行き、アウトリーチ活動があることを宣伝する機会をもつ
07	3	0			4	④まずは一度アシスタントとして入りたい ⑤全員が一度は参加できるようになればよい
08	1	0			4	④積極的に陪席に参加する ⑤陪席経験に偏りがないようにする
09	2	0			3	④まずは参加することで、その場を知り、専門の視点で考えること ⑤陪席する際には自ら勉強しておく必要があると思う
10	4	0			4	④参加したかったが、ケースがあり参加できなかったが、少しでも現状を知る機会を得て社会貢献できる ⑤"アウトリーチ" という意識をもう少し一人ひとり考えるような工夫（突然始まった印象なので）
11	4	0			4	④参加経験がないので、まず参加させていただくところからだと思う
12	4	0			4	④できるだけ参加させて頂くことで、自分に何ができるか、何を求められているか、何を身につけたらよいかがわかってくると思う ⑤行かれた方の報告書を閲覧できるようにしてほしい
13	2	0			3	記入なし
14	1	0			4	④実際の報告を聞いて、自分だったらどうするかを考える ⑤実際に現場の支援を必要としている方々が何を求めているかなどを学生からも聞いてみる、学生も何かアプローチできたらいいと思う
15	3	0			4	④地域活動についてもっと関心をもって、様々な仕事について知ること
16	2	0			4	④参加したいが、時間のことがあり難しい
17	2	0			4	記入なし
18	2	0			4	記入なし
19	1	0			4	④アシスタントに入った時に考えたい

表1　アウトリーチ活動についての回答（続き）

20	2	0			3	④活動の基盤となる経験、知識を増やす ⑤地域貢献に付随する経験が自分の血肉となると考えるべき
	平均 2.4	計 4			平均 3.95	

表1からわかるように、回答者の中でこの時点でアウトリーチ活動に陪席できた学生は4名である。今年度は最終的に12名が陪席予定であり、院生、研修生のうち、今年度陪席経験が可能となる者は約半数程度となる。

「アウトリーチといいう言葉を事前に知っていた」程度は平均2.4（Range 1-4）で、うち、1あるいは2と答えた者が12名も存在していた。その意味では、今回のアウトリーチ活動は、臨床心理士の活動形態のイメージを広げることに貢献したと言えるだろう。

「意識高揚」は参加経験者4名のうち3名が5（1名は4）と極めて高く評価していたことが印象的である。また、「(現場で）正直何ができたのか（#02)」「ほとんど何もできなかった（#03；#06)」という回答もみられるが、実は「何もできない」という歯がゆさを身をもって感じることはこの陪席体験において大切なポイントであると筆者は考える。この無力感が次のステップを生む動機づけになると思うからである。さらに、#2の学生が書いているように、教員の対応により現場の先生方が変化される様子を見ることは、臨床心理士の役割の大きさを再認識するきっかけになり、随行学生にとって格好のモデリング学習となる。これらアウトリーチ活動をおこなう意義を、学生は感度良く捉えてくれているように思われ、このあたりが意識高揚につながっていると筆者は考える。

「事前調査」については、経験者4名のうちおこなったのは1名のみであり、「事前関与」も4名のうち「積極的におこなった」は1名のみ、「全くしなかった」が3名であった。担当教員から知らされる、あるいは、現地に赴くまで、先方の情報や役割を何も知らないまま臨む学生が多かったわけである。自由記述をみると、事前調査や関与をおこなった学生（#2）は「何もできなかった」という言及はしておらず、積極的な準備が現地での体験に影響していることがわかる。事前準備不足の学生が多かったのは、本活動が教員側の主導で進められたこと、学生への事前説明が十分でなかったということもある。だが、参加が決まってから少し時間があったはずで、集合時間や当日の役割など学生の方から教員に申し出るなどして積極的に自分のできることを開拓してほしいところでもある（多忙な教員に声をかけ手を煩わせることをためらったのかもしれないが)。何も手掛かりのないところから、自分なりに居場所や役割を見出していく開拓力は臨床心理士が地域援助活動を進めるうえで不可欠である。その意味で訪問にまつわる疑問点を率直に教員に尋ねるなど、学生自ら改善への起爆剤となってくれることを願う。特にこの活動は整備途中のプログラムである。だが逆にそれを学びのチャンスと捉えなおし、学生の側から「もっと～してほしい」から「もっと～してはどうだろう」への転換がはかられることを期待したい。もっとも、この点については、実際に参加した学生を中心に、自分に何ができるのかを考える機運が生まれている。今後の学生たちの動向を見守っていきたい。幸い陪席を希望する学生は多く、まずは一人でも多くの学生が陪席し、現場を肌で体験できる機会が持てるよう、地域の幼稚園や学校等とのネットワークづくりをはじめ、教員も奮闘したいと思う。今回、アウトリーチ活動で教員や院生が出向くことで、現場の教職員や保護者の方に、本学相談室に実際にどのような人間がいるのかを見知っていただき、本学相談室を身近に感じていただく機会となったことも大きな収穫であった。効果のほどは、まだ未知数ではあるが、この活動が今後相談室の本来の活動である相談申込にもつながることを願っている。

（5）地域実践部の活動全般について

ここでは、「地域実践部の活動は臨床心理士の活動についてのこれまでのあなたのイメージに変化を

もたらしたか（イメージ変化）」「地域実践活動プログラムについてのあなたの評価は（全体評価）」の２つの質問をおこない、５件法で回答を求め、さらに「地域実践活動から気づいたこと」「地域実践活動プログラム全体についての考え」を自由記述で求めた。平均は「イメージ変化」3.95（Range 2-5）「全体評価」4.35（Range 3-5）であった（「イメージ変化」評点２は１名のみ、「全体評価」評点３は３名のみ、評点５は10名あった）。ここから、おおむね一連の地域実践活動が高く評価されていると考えられる。

自由記述からは、①臨床心理士の役割、地域活動のイメージや視野が広がった（９名）、②地域の方との直接の関わりを持つ意義（７名）、③地域の方のニーズの高さを知った（５名）などが特に強調されていた。また、教員が忙しくなりすぎていることを心配する声もあった。担当の有無にかかわらず、M1、M2、研修生と立場は異なっても、全員が前向きにこれらの地域実践活動を捉え、さらに積極的に関わっていこうとする姿勢が示された点からこのプログラムはおおむね目的を達成できたと評価できるのではないか。

６．最後に

今回、まだ実施途中ではあったが、学生へのアンケート結果も交えて、地域実践部の活動を振り返ってみた。そこからわかったこととして、（地域にとって有益な活動となることが第一であることは言うまでもないが、）学生への教育において、さらに有意義な活動とするには、①学生が有意義と感じる度合は、種々の役割や担当など学生がコミットする度合と比例する傾向があること、②活動の意義、活動形態に込められた意図や狙いなどについて、学生たちとさらにコミュニケーションをはかっていくことが必要であること、③特にアウトリーチや無料相談は先方の申込状況に左右されるため、学生の経験に差が生じやすい。従って、報告会の実施、報告書の自由閲覧、体験連絡会など、担当できなかった学生も活動（直接担当者）をサポートし、コミットできるようにすることで経験を共有できる。そのための工夫が必要となること、などが挙げられる。我々の活動がイノベーティブであるためには、活動が完成されたものではなく常に形成途上の“プロセス”であることを謙虚に自覚し、改善のために開かれた姿勢であることが重要である。まだ始まったばかりのささやかな地域実践であるが、これらの活動が有機的に結び合って、地域、学生、大学、いずれにとっても意義あるものとして発展していけるよう努力していきたいと思う。

謝辞：今年度の地域実践部の活動は、主に神戸女学院大学研究所の助成金によって運営されました。この場を借りて感謝申し上げます。

文献

山本和郎編　2001　臨床心理学的地域援助の展開　培風館